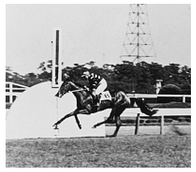
ムカシの競馬を読む



須田鷹雄（すだ たかお）
1970年東京生まれ。競馬ライター。サラブレ、大阪日刊スポーツなど各種媒体に寄稿中。

第122回 10年・20年・30年前の10月

今から10年前、平成17年の10月というのは、なかなか盛りだくさんな月だった。

月末の天皇賞秋では、ついに天覧競馬が実現。松永幹夫騎手がメモリアル60の前で脱帽し敬礼するシーンは、10年経っても我々の中に鮮烈に残っている。

その前週にはディープインパクトが無敗の三冠を達成。いよいよ同馬のブームも社会現象になってきた。

月のはじめにはサイレントウィットネスがスプリンターズSを制覇。香港短距離界の強さを日本のファンが再認識したレースだ。

これらの印象的なレースには、またいろいろな経緯や出来事があった。サイレントウィットネスについてはこんなことも起きていた。10月1日付の東スポから引用しよう。

「日曜は秋Gシリーズ第1弾の第39回スプリンターズS。群雄割拠の電撃6ハロン戦、ところが前日（1日）にとんでもないハプニングが起きた。大本命と目される香港史上最強スプリンター、サイレントウィットネスが『暴走』。ただごとではない」

暴走というのはただの暴走ではない。同じく香港から来たケープオブグッドホープとともに馬場に入り最終調整を行っていたところ、4コーナー手前で馬が躓いてコーツィー騎手が落馬。東スポの記事によると13秒5→12秒5という速いラップを刻んでしまったそうである。

「クルーズ調教師はさすがに落胆したのか、国際厩舎前に集まった報道陣の前には姿を見せず会見を拒否」と記事にはあるから、やはり調整上決定的な出来事だと感じられたのだろう。

……しかし、翌日レースをしてみたらあっさり勝てたのは皆さんご存知の通り。レベルの高い香港のスプリント界、その中の伝説的名馬はやはりレベルが違ったということか。

ディープインパクトに関しては、馬とは全く関係のないところでおきていた出来事について書いてみよう。10月25日付の、こちらも東スポから。ディープインパクトブームが、金子真人オーナーの経営する図研の株価に影響を与えたという話である。

「例えば日本ダービー出走前に997円だった株価は、ディープが優勝すると一時1071円まで跳ね上がる。『ディープ馬券は儲からなかったけど株で大儲けした』（個人投資家・Aさん）」

「当然、2匹目のドジョウを狙う個人投資家が、菊花賞の前に同社株を購入。その影響で9月前半まで1100円前後だった同社の株価は、菊花賞前の金曜日に1339円で取引を終了する。ところが、24日（筆者注：菊花賞翌日）の株式市場は『ストップ高で間違いなし！』という予想に反して株価は暴落。1339円が一時1251円、終値でも1271円と5%以上も値下がり。東証一部のランキングでワースト4位に入るていたらくを記録した」

実は筆者も当時図研株を持っていたのでこれはよく覚えている。金曜の最後に利確したので個人的には難を逃れたのだが、こんな値動きをするということは本当のブームなのだなと痛感したものだった。世間一般に通用する知名度を得ないと、このような騒ぎは起こらない。

それにしても、ダービー後の高値より菊花賞後下がった価格のほうが高いのだから、正解はずっとホールドだったのではないかという気もするが、まあそれは別の話ということで。

20年前、平成7年の10月は、1日にラムタラが凱旋門賞を制している。輸入された日本で種牡馬としては成功しなかったラムタラだが、母の父としてはヒルノダムールを出した。

この月の出来事として、こんなものを10月29日付の日刊スポーツから引用しよう。

「日本一の長寿サラブレッドとして知られる名牝カネケヤキ（35歳）が、28日午後0時30分にけい養先の青森県上北郡横浜町雲雀平の青森牧場でこの世を去った。老衰による心不全だった。カネケヤキは桜花賞とオークスを制した女傑で、今も健在の五冠馬シンザンと同期生、人間なら100歳を超える馬齢だった（以下略）」

カネケヤキの死によってシンザンがその時点での最高齢サラブレッドとなり、翌年7月まで生きて最長寿記録を大幅に更新した。

しかし記録というのはいつか更新されるもので、昨年（平成26年）になって、新記録が樹立された。元南関東の競走馬アローハマキヨで、現役時代の成績は61戦2勝。長野県の乗馬クラブで繋養されていることが判明して、シンザン超えが確認された。

生まれが昭和54年というから、同期の東京ダービー馬はダイシンシラユキ（翌年の東京ダービー馬がサンオーイ）。中央の同期ダービー馬はバンブーアトラス。まさにレジェンド的な長寿である。

最後にいまから30年前、昭和60年10月の出来事をご紹介しよう。まずは、まさかという珍事。12日付のサンスポからご紹介しよう。本文中の年齢表記は旧表記。

「きょう12日行われる福島競馬10R（4歳未勝利戦）に出馬投票したメグロリイフオー（美浦・境征厩舎、牡4歳）が急きょ、発走除外になるハプニングがあった。同馬は出馬投票した後、4枠5番と枠順発表されたが、境調教師の馬名誤記と判明し、競馬会は11日午後、発走除外とした。境師が使える状態にないメグロリイフオーを誤って投票したもので、使う予定のメグロコダマは『幻の出走』となった」

10月の4歳未勝利といえば、いまでいうスーパー未勝利にあたる時期。そこを1走失ったメグロコダマは翌年3月まで400万条件に出たりしていたが結局は中央未勝利。地方転出して紀三井寺や中津で走り、そちらでは計11勝をあげた。

最後に30年前からもうひとつ、最近はなくなってしまったものについてお届けしよう。10月13日付の日経新聞から。

「第一回アジア競馬会議加盟国騎手招待競走（距離1600m）は12日、東京競馬場のメーンレースとして行われ、フィリピン代表のドミンゴ・ジュニア騎手が騎乗したチュデキングが優勝した。2着はバーレーン代表のエブラヒム騎手が乗ったリンネスプレンティ」

このとき他に来日したのは、タイのニヤマパ騎手（7着）、韓国のジー騎手（8着）、インドネシアのメウェンカン騎手（11着）、ニュージーランドのウォルシュ騎手（12着）。引いた馬が弱かったようだが、唯一競馬先進国と言えるニュージーランドの代表騎手が12頭立て12着になってしまった。

かつてはアジア競馬会議というと騎手招待競走がつきものだった（日本騎手が先方に行くこともあった）が、最近は無くなってしまった。世界のトップジョッキーが来日してくれるため、アジア騎手を呼ぼうという動機もなくなっている。私の記憶が確かならば、平成11年のアジアジョッキーズが最後の機会だろう。

個人的は「知らないジョッキー」が来るのは楽しいので、またなんらかの機会ができてほしいものである。さらにもうひとつ、中央競馬の若手騎手をアジアに派遣する機会を追求してもいいかもしれない。ドバイ・カタール以外の中東や、タイ、フィリピンあたりに派遣すれば、若い中央騎手が「いかに普段自分は恵まれているか」を認識するきっかけにもなるだろう。

平成17年・中山競馬場
スプリンターズS
優勝馬：サイレントウィットネス

© JRA